
現代社会の「神話」とネイション
Mythes et nations dans les sociétés contemporaines

趣旨と総括
Introduction

コーディネーター：小倉和子
OGURA Kazuko

本シンポジウムは、G・ブシャル教授の基調講演「グローバリゼーションの強い影響下にあるナショナルな神話の状況」を承け、現代社会における「神話」の機能について、いくつかの地域を取り上げながらさらに検討するために企画された。共同体の形成に重要な役割を果たしていると考えられるさまざまな「神話」は、ケベック、カナダ、日本、あるいはアフリカ諸国のネイション構築においてどのような機能を果たしてきたのだろうか。それらは今後どうなっていくのだろうか。こうした問いが出発点にあった。

まず、杉原賢彦会員（立教大学—当時）から「映画による神話投影—ケベックからアフリカへ」と題する報告があった。J-M・フロドンの『映画と国民国家』を引きながら、20世紀には国民の歴史と映画の歴史のあいだに密接な相関関係があったことが指摘された。そして、『かんじき競走者たち』（M・ブロー／G・グルー、1958）に代表されるようなケベックのダイレクト・シネマが、民衆のありのままの姿を映し出すことによって彼らの自覚を促し、〈静かな革命〉を牽引したこと、そればかりか、J・ルーシュとの出会いにより、フランスのシネマ・ヴェリテを経由して、独立直後のアフリカ諸国のネイション構築にまで寄与したことが、多くの貴重な映像とともに示された。

次の伊達聖伸会員（上智大学—当時）は、「現代日本におけるネイション神話の諸側面」と題する報告で、日本社会が未だに「引き延ばされた戦後」を生きているとしたうえで、それを支えてきた3つの代表的な神話とその結びについて検討した。その神話とはすなわち、「単一民族神話」、「終戦にまつわる神話」、「原発安全神話」である。日本民族は先住民族や大陸からの帰化人と融合しながら同一民族として神話化され、終戦記念日は死者を思うお

盆と融合して人々の記憶に留められ、被爆国日本はその悲惨さを体験しているからこそ原子力の平和利用に貢献できるのだという神話が打ち立てられる…。こうした過程で用いられてきた巧妙なレトリックが、小熊英二、佐藤卓己、吉見俊哉らの著作を引きつつ明るみに出された。

3番目の報告は、特別ゲストの大中一彌氏（法政大学）による「道理と合理のあいだ：間文化主義に関する若干のコメント」であった。氏は、ブシャール教授の著作『間文化主義』、『ブシャール＝テイラー報告書』、『神話の合理と非合理』などを丁寧に読み解いたうえで、一昨年10月にケベック州で成立した62号法に言及し、公の場でのニカブやブルカの着用を制限しようとする昨今のケベック州はフランスに似てきているのではないかと指摘した。近年のイスラム諸国に見られる女性の「控えめなファッション」が、「文明化」に伴う画一化の現れなのか、それとも「生き残り」をかけた「国民文化」の側の闘いなのか、はたまた女性がみずからの身体的自由を行使した結果にすぎないのか、と問いながら、近年さまざまな場面で生じているリベラルな価値観とそれに逆行する動きとをケベック的文脈の中で理解する試みであった。

最後は大石太郎会員（関西学院大学）による「カナダのアイデンティティを表象する首都オタワのカナダ・デー」と題する報告だった。1982年、それまでのドミニオン・デーからカナダ・デーと改称されて現在に至る、実質的な建国記念日である7月1日を祝う首都オタワでのイベントがどのように変化・発展してきたかを主要紙の記事と現地観察に基づいて検討した。1990年のミーチレイク協定の破綻以降、ショーではそれまで以上に国家の一体感が演出されるようになったことが指摘され、今後は先住民も含めた「建国の3民族」という新たな神話が作り出されていくのではないかと締め括られた。

「ネイション」と「神話」——検証すべき時代も地域も限りなく広がりうるテーマだったが、以上が4名の登壇者からの報告の概要である。このあとブシャール教授からもコメントをいただいた。中でも、伊達会員が論じた日本の「単一民族神話」（「神話」として捏造されたもの）には殊のほか関心を寄せたようだった。もしかしたら間文化主義の第一人者の頭の中には「多様性のケベック」対「単一性の日本」という図式が出来上がっていたのかもしれない。その後の懇親会や講演の場でもこの点を繰り返し出席者たちに尋ねていたのが印象的だった。また、大中氏の発表にたいしては、宗教的標章をめぐる問題に政府が介入して成功した例はない、これは世俗社会（企業など

の現場)が組合や少数の知識人とともに決めていくしかないものだ、と実感のこもったコメントが寄せられた。

いつものことながら、活発な質疑応答は時間内には終わる気配を見せず、懇親会場へと持ち越された。

(おぐら かずこ 立教大学教授)

【シンポジウム】

現代社会の「神話」とネイション
 Mythes et nations dans les sociétés contemporaines

映画による神話投影 — ケベックからアフリカへ
 La projection du mythe par le cinéma
 — du Québec à l’Afrique

杉原賢彦
 SUGIHARA Katsuhiko

国民国家とその背景にある神話について、フランスの映画批評家ジャン＝ミシェル・フロドンは『映画と国民国家』において、次のように書いている。「二十世紀は映画の世紀であった。映画は大衆のレジャーとして、新しい芸術創造の様式として、そして同時代の神話の造り手として自らの地位を確立した」（『映画と国民国家』岩波書店、2002年）。

実際に、映画は19世紀末に誕生し、20世紀を通してその隆盛をきわめてゆくのだが、20世紀後半、植民地状態から脱して新たな国家を建設してゆく過程において、その神話再創造の一翼を担ったものとしてとらえ直してみることができるのではないだろうか。

なかでもケベックにおける映画は、1960年代の「静かなる革命」の時代を通して、ケベックの人々を統合する役目を担っていたと思える節がある。ケベック映画は、1958年、ミシェル・ブローとジル・グルーの共同監督になる“Les Raquetteurs”を端緒として始まった。毎年2月にケベックで開催される雪祭りの模様をドキュメンタリー映画としてとらえたこの作品では、のちにダイレクト・シネマと呼ばれる技法、すなわち、撮影と録音を同時に行うという手法が世界で初めて採用された。この技法は、カナダ国立映画庁（NFB/ONF）が独自に開発したものであった。ケベックの人々が集う様子を文字どおりダイレクトに記録した掌編にすぎなかった作品は、しかし、こののち、ケベック州内においてはもとより、フランス、そしてフランス語圏のアフリカ諸国へも大きな影響をもたらすことになる。

まず、ケベック州内においてであるが、自分たちの現実を映像によって見

ると同時に音によっても再確認できたということ。人々は、自らの似姿（＝イメージ＝かんじきを履いた人々）を映画のなかに再発見することによって、自らのアイデンティティを再確認していったということでもある。この映画が、緩やかに進行しつつあった「静かなる革命」の呼び水のひとつとなっていたことについて、もういちど確認する必要があるだろう。

そしてその一方で本作はまた、1960年のアフリカ年を契機として大きな潮流となってゆくアフリカ諸国の独立にも、多大な影響をもたらすことになる。

その核心にいたのが、文化人類学者ジャン・ルーシュだ。ルーシュは、文化人類学のフィールドにいち早く映像をもち込み、その後の映像人類学の礎をつくったひとりでもある。1958年、彼は『我は黒人』という、コートジヴォワールの首都アビジャンを舞台に、若者たちの日常を追った作品を撮る。ドキュメンタリーとフィクションが融合した、いわばドキュ＝フィクションとも呼べるこの映画は、労働者として日々を送る若者たちに、自身とその夢を、虚実織り交ぜて語らせ、演じさせた。その結果、20世紀半ばにおけるアフリカの都市の現状を映像ドキュメントとして提示する一方、セリフや背景音がアフレコによって加えられているため、映像の現実にはフィクショナルな音が付随するという、やや混乱した作品でもあった。

ルーシュは、1958年のロバート・フラハティ・セミナーに参加した折、“Les Raquetteurs”のを知り、同時にミシェル・ブローとクロード・ジュトラとも会う。撮影と同時に録音ができるシステムに可能性を認めた彼は、1961年、エドガール・モランとともにつくった『ある夏の記録』で、ブローらの手法を採り入れ、ブローを技術顧問として招き入れることになる。

このとき、ケベックで生まれた映画とその技法はジャン・ルーシュを通じてフランスにもたらされ、当地で興りつつあったシネマ・ヴェリテの中核をなしていったのだ。

それにも増して重要なのは、このケベック発の映画と技法が、ルーシュを通じてアフリカの映画へもたらされたということだ。前述したルーシュの『我は黒人』の主人公のひとり、ニジェールからの出稼ぎ移民であったウマル・ガンダは、この映画ののち、1960年代半ばに故郷であるニジェールに戻り、そこでニジェールで最初の映画監督となる。

1968年、彼は処女作“Cabascabo”を撮るのだが、そこには父親世代が宗主国であるフランスの傭兵としてインドシナ戦争に駆り出されていった記憶が描かれていた。ドキュメンタリー映画的手法によって、現実の彼らの姿と、

過去の出征の様子がフラッシュバックで描かれる冒頭。出征のシーンには、“Les Raquetteurs”の行進シーンを彷彿とさせるものがある。同時にそこには、独立間もないニジェールの人々にとっての、共同幻想的体験が描かれており、それによって自らのアイデンティティを再確認することが可能となっていたのだった。

1960年代から70年代にフランス語系アフリカ諸国でつくられた映画を見てゆくとき、フランスのための戦争に駆り出されていった記憶をめぐる作品を多く目にする。神話を、国民を統合するための物語装置と見做しうるなら、そこで語られる物語は、新たな国民にとって共通する事項であるだろう。そしてその語りのためのもっとも効果的な機械装置として、映画は20世紀において重要な位置を占めていたのではないか。

ケベックとアフリカを結ぶラインの存在と、同じ時代に独立とその機運を迎えた地域と国家を結ぶものとしての映画という存在。20世紀に誕生した新たな国民国家の神話再創造を、映画からもういちどとらえ直すことができるのではないだろうか。

(すぎはら かつひこ 目白大学特任准教授)

現代社会の「神話」とネイション
Mythes et nations dans les sociétés contemporaines

現代日本におけるネイション神話の諸側面
Quelques aspects des mythes nationaux du
Japon contemporain

伊達聖伸
DATE Kiyonobu

ジェラルド・ブシャール教授の基調講演を受けて、戦後日本社会における神話のいくつかの側面を紹介し、ひとつの応答と対話の場の構築を試みたい。

神話はしばしば宗教的な形式において表明されるが、近現代社会においては世俗的な形態を取ることも珍しくない。ところで、「宗教」と「世俗」という用語は、西洋近代の歴史的展開が前提となっており、日本に直接的に適用することは問題を孕みうる。ネイションの神話に注目するアプローチは、この問題を回避しながら有効な比較を可能にするような利点がある。

第2次世界大戦終結から70年以上が経過しているが、日本社会に暮らす私たちは今なお「戦後」と呼ばれる時代を生きている。ところで、まさにこのように戦後が引き延ばされていることによって、戦後日本社会を支えてきたいくつかのネイションの神話に綻びが出てきていることが、はっきりと見えるようになってきている。

日本人は単一民族であるという神話は古くに遡るように見えるかもしれないが、小熊英二の『単一民族神話の起源』（1995）が明らかにしているように、戦前の日本においてはむしろ多民族帝国としての言説が支配的で、均質的な単一民族の神話が定着していったのは、敗戦にともなう領土の喪失と人口構成の変化、そして戦争に疲れた国民が平和な文化国家の建設にアイデンティティを見出していく文脈においてのことだった。

私たちが今もなお「戦後」という時代を生きているとすれば、それは正確にはいつはじまったのか。換言すれば、先の大戦が終わったのはいつなのか。日本人の記憶においては、玉音放送のあった1945年8月15日が特権化され

ているが、いわゆる世界の歴史においては、それから半月後の9月2日にアメリカの戦艦ミズーリの甲板上で降伏文書に調印されたことをもって、第2次世界大戦が終結したとされている（いわゆる V-J Day）。佐藤卓己『八月十五日の神話』（[2005] 2014）は、戦後の日本人がいかに「敗戦」の日である9月2日を忘却し、「終戦」の日としての8月15日を国民的コンセンサスにしていったのかを明らかにしている。

国民的な悲劇と呼べる事件や出来事がきっかけとなって、それまで覆い隠されていた神話が人びとの目に明らかになることがある。なかでも2011年の東日本大震災は、戦後日本社会を支えてきた原子力安全神話を大きく揺るがした。「核」と「原子力」はもともとと同じもので互換可能なものだが、戦後日本においては、「核」は軍事用（「核戦争」「核実験」）、「原子力」は民生用（「原子力発電所」）と訳し分けられてきた（三浦、2014）。

それにしても、なぜ広島と長崎に投下された2つの原爆のあとで、日本は原子力発電所の建設を進めることができたのだろうか。吉見俊哉は、まさに原爆の被害を受けた日本人だからこそ、原子力の平和利用に貢献しなければならぬという言説が、恐怖を約束に転換することを可能にしたと指摘する。背景には、アメリカの対日政策が、軍事国家日本の解体から、冷戦下における共産主義への防波堤として日本を位置づける方向に変化したこともある。放射性降下物を含んだ黒い雨を受けた日本は、こうしてアメリカの核の傘に入ったのである（吉見、2012）。

戦後日本は、ヤヌスのような二面性を持っている。表向きの顔は経済的な復興と繁栄を遂げた平和国家だが、もうひとつの顔は米国に追従せざるをえない敗戦国であり、それは米軍基地に象徴されている。戦前の日本における絶対的な参照軸が天皇であったとすれば、戦後はそれがアメリカに取って代わられた面がある（吉見、モーリス＝鈴木 2010）。

現代の日本においては、単一民族神話も、原子力安全神話も大きく揺らいでいるが、かといってこれらの神話は簡単に消え去るものではない。近い日本の将来を構想するに際しても、天皇とアメリカは重要な神話の構成要素であり続けるだろう。それでも新たな神話が構築されるに際しては、いわゆる普遍的な世界史の文脈における近代の人権という神話のポジティブな遺産も、うまく取り込むことが重要だと思われる。

（だて きよのぶ 東京大学准教授）

参考文献

- 小熊英二（1995）『単一民族神話の起源——「日本人」の自画像の系譜』新曜社。
- 佐藤卓己（〔2005〕2014）『八月十五日的神話——終戦記念日のメディア学』ちくま学芸文庫。
- 三浦信孝（2014）「社会科学の翻訳における「翻訳は裏切り」」西永良成・三浦信孝・セシル坂井編『日仏翻訳交流の過去と未来』大修館書店、213～229頁。
- 吉見俊哉（2012）『夢の原子力』ちくま新書。
- 吉見俊哉、テッサ・モーリス＝鈴木（2010）『天皇とアメリカ』集英社新書。

注記：シンポジウムでの発表はフランス語で行なった。なお、その発表を元にしたフランス語の論文「Des mythes nationaux du Japon contemporaine : Entre le besoin de démythification et de déconstruction」を以下に発表している。ご関心のある向きは参照していただければ幸いである。*Bulletin of Faculty of Foreign Studies, Sophia University*, No. 53 (2018), 2019, pp. 157-179.

【シンポジウム】

 現代社会の「神話」とネイション
 Mythes et nations dans les sociétés contemporaines

 道理と合理の間：間文化主義に関する若干のコメント
 Entre le raisonnable et le rationnel :
 quelques commentaires sur l'interculturalisme

 大 中 一 彌
 ONAKA Kazuya

ある種の政治観からすれば、政治においては、異なる価値が対立する。そして、そうであればこそ、既存の制度内において統治をおこなう側には、論理的一貫性という点で多少の難はあっても、大方のひとが認容しうのような道理ある調整が求められる。その一方で、既存の制度に対し、政策上のさまざまなインプットを行おうとする諸集団は、おのおのの集団が掲げる特殊な価値の名において、仮に実現は困難であっても、一貫性のある要求を発信しつづけることができる。

こうした政治観から、今回のシンポジウムに際し筆者がコメントさせていただいた、ジェラルド・ブシャール氏の間文化主義について論ずるなら、間文化主義は、〈静かな革命〉以降のケベック社会のあり方を前提としており、カトリック信仰のような伝統的な文化要素をアイデンティティの中核に見出すといった意味で、特殊な価値をもっぱら主張する立場ではない。むしろ、世俗化され、異文化間を含めた「道理ある調整 (accommodement raisonnable)」が織り込まれた、民主的統治のための「中庸のモデル (modèle mitoyen)」として、ブシャール氏は間文化主義を提示する。

ブシャール氏の問題関心で興味深いのは、民主的統治のためのモデルとしての間文化主義が、歴史や社会をめぐるより広範な展望のなかに組み込まれている点だ。例えば、間文化主義はその道理ある調整の基準として中庸を重んじるが、ブシャール氏は、フランス式の共和主義は多数派に肩入れしすぎるとの理由で中庸から外れるとする。この見方は、何が中庸でないかという否定的な仕方でも間文化主義を定義づける意味で重要だが、個人的には、『ケ

ベックの生成と『新世界』(彩流社、2007年)で展開されているような、北アメリカ大陸やオセアニアを初めとする「新世界」において生成した諸ネイションのひとつとしてケベックを位置づける歴史観と通底しているように思われる点で、よりいっそうの興味を覚える。

このシンポジウムの主なテーマでもあった「神話」という概念は、間文化主義を取り巻く、ブシャール氏のより広範な、もうひとつ別の展望を示している。氏が「神話」の概念について詳しく論じている著作のひとつが *Raison et déraison du mythe* (Boréal, 2014) だが、その中に「指導的神話」という概念が登場する。「ある社会の文化を構造化し、他の神話の形成を左右する母胎として作用する基本的な象徴の組み合わせ」というのがその定義だが、ブシャール氏は、ヴィクター・ターナーの「ルート・パラダイム」など、16名ほどの文化人類学者や社会学者が類似の学説を唱えているとする。

ブシャール氏の間文化主義において、ひとつの社会のなかのさまざまな文化は、多数派の文化の周囲にでも、少数派の文化の周囲にでもなく、ある共通文化のもとに結集する。そしてこれらの複数の文化は、それぞれに想像域^{イマジネール}や、想像域に構造を与える指導的神話を備えており、共通文化には、ひとつの文化として「既存の社会的な布置を乗り越えるような新しい神話を考案すること」が求められる。では新しい共通文化の考案や、諸文化の結集を可能にする軸は何かといえば、それは共通の価値である。例えば「西洋においては」、検閲や名誉殺人や性器切断、一夫多妻制は禁止であるという。ケベック文化を「ギリシア＝ユダヤ＝キリスト教的」伝統とのみつながらとする論者を斥けながらも、ブシャール氏は、公的機関に勤務する人びとにおけるブルカやニカブの着用禁止を、「文明」を根拠として正当化する。

新しい共通文化をめぐるブシャール氏の立論を、「新世界」における西洋文明の定着を前提とするものだと日本語で批判するのは、日本人のナショナリズムが自己の非西洋性をその想像域に秘めているだけに、たやすいことである。筆者としてはむしろ、こうした立論の背景にある、ある不安に着目したい。

近年、北アメリカや西ヨーロッパにおいて、文化的多数派によるアイデンティティ政治ともいべきポピュリズムの興隆が見られるが、その背景には、『軽いシティズンシップ』(岩波書店、2013年)におけるクリスチャン・ヨブケの表現を借りるなら、「中心はもちこたえるのだろうか」という、アイデンティティとしてのシティズンシップをめぐる不安がある。

この不安に対するブシャール氏の答えははっきりしている。それは、ケベックにおける「指導的神話」が含む、足場の弱い少数派の生き残りという想念をバネにした「健康な文化」の推奨である。すなわち、ある文化の健康度は、異文化との接触や交渉のなかで自文化の内容をより豊かにすることを通じて保たれるのであり、ケベックにおける多数派の文化、すなわち「古いフランス語話者のアイデンティティ」を保護すべく、異文化との接触や交渉を絶ち、孤立して存在しつづけようと夢想するのは、かえってケベックのアイデンティティの存続をあやうくすると、ブシャール氏は警告するのである。文化という単語に「健康な」という修飾語をつける点や、生き残りというモチーフを用いた社会進化論的な動機づけ（適者生存）に若干の危うさを感じる一方で、自由主義的な価値観に基づく開かれたアイデンティティを構想したいというブシャール氏のコミットメントには、心から敬意を表したい。

（おおなか かずや 法政大学教授）

現代社会の「神話」とネイション
Mythes et nations dans les sociétés contemporaines

カナダのアイデンティティを表象する
首都オタワのカナダ・デー
La fête du Canada dans la capitale nationale :
Reflet de l'identité canadienne ?

大石 太郎
OISHI Taro

カナダは、北アメリカに形成された性格の異なるイギリス領諸植民地が1867年に連邦を結成して成立した自治領を基盤に発展した国家である。そうした経緯から、カナダは当初から地域的に多様であるとともに、2つの言語を公用語としてきた。また、ヨーロッパ各地からの移民を受け入れてきたことから、従来から文化的・宗教的にも多様であったが、移民政策の変化や多文化主義政策を背景に、文化的多様性はさらに増しつつある。このように多様性を特徴とする国家において、カナダ人というアイデンティティはどのように育まれるのであろうか。そこで注目されるのは各種の祝日であり、とくに連邦結成を祝うカナダ・デーは、カナダのアイデンティティを考えるうえでもっとも重要な祝日である。本報告では、2005年以降の現地観察と主要紙の記事にもとづいて、首都オタワのカナダ・デーのイベントの特徴を明らかにし、そこに表象されるカナダのアイデンティティを検討した。

カナダ・デーは、1867年7月1日のカナダ連邦結成を祝う日であり、1879年に祝日とされ、ドミニオン・デーとよばれてきた。ただし、当初は大きな行事が開催されることはなく、連邦結成60周年となる1927年に初めて連邦政府がかかわって各地で大規模なイベントが開催された。その後、1958年になって首都オタワで連邦政府主催の祝賀行事が開催されるようになり、1976年をのぞいて現在まで続いている。そして、1982年になって公式にカナダ・デーという名称となり、1970年代後半以降のケベック州における主権獲得運動の盛り上がりを背景に内容の充実が図られてきた。

オタワにおけるカナダ・デーのイベントの中心は連邦議会議事堂前広場のヌーン・ショーであり、カナダ放送協会によって全国に生中継される。ヌーン・ショーには通例、カナダ総督、カナダ連邦首相と責任大臣である文化継承省大臣（1996年以前は内務大臣）が出席し、演説する。また、イギリス王室関係者が出席することもあり、最近では1990年、1992年（連邦結成125周年）、1997年（連邦結成130周年）、2010年にエリザベス女王が出席した。連邦結成150周年であった2017年にはチャールズ皇太子が夫人とともに出席し、2011年には結婚直後にカナダを歴訪したケンブリッジ公夫妻が出席した。

ヌーン・ショーは、招待された歌手によるカナダ国歌の独唱で始められることが多い。カナダ国歌には英語とフランス語の歌詞があるが、このような国家的行事の場合には、最初のパートが英語、真ん中のパートがフランス語、最後のパートが英語で歌われるのが一般的である。また、英国王室関係者が臨席する際には英国国歌も歌われる。ショーでは、国歌独唱に次いで、文化継承省大臣、首相、さらには総督が演説する。そして、要人の演説の間にカナダ各地から招待されたアーティストの演奏が披露される。

議事堂前広場のイベントの特徴は以下のようにまとめられる。第1に、カナダ人のアイデンティティを強化する装置となってきたことである。とくに、1990年代前半はカナダの一体性を揺るがしかねない出来事が続き、国家の結束が強調される機会となった。1990年のカナダ・デーはミーチ湖協定の不成立が確定した直後であり、臨席したエリザベス女王も結束を訴えている。第2に、徹底した2言語主義である。総督や首相はもちろん、ヌーン・ショーに出席する英国王室関係者も演説に必ずフランス語を取り入れている。一方で、ステイタス・クオの原則もおおむね維持されている。すなわち、総督や首相の演説においてフランス語の部分は3分の1から4分の1程度であり、カナダにおけるフランス語話者人口の割合よりもやや高めではあるが、いずれの話者からも不満が出にくい程度にとどめられている。第3に、「建国の2民族」への配慮である。たとえば、初代首相マクドナルドの生誕200周年であった2015年のカナダ・デーのヌーン・ショーでは、マクドナルドがフランス系の盟友ジョルジュ＝エティエンヌ・カルティエと語り合う寸劇が披露されている。

このように、これまでの首都オタワのカナダ・デーのイベントでは、2言語主義や「建国の2民族」といった要素が重視されてきた。しかし、最近になって新たな「神話」の萌芽も感じられる。たとえば、近年になって先住民の歴

史が見直されつつあり、国家的行事において先住民への配慮がこれまで以上に欠かせなくなっている。そこで、先住民を含めた「建国の3民族」という日がくるかもしれない。また、最近では「カナダ全土にわたって」という意味合いで、from coast to coast to coast というフレーズがカナダ・デーにおける要人の演説でも好んで用いられるようになってきた。すなわち、夏季に航行が可能になった北極海はもはや氷に閉ざされた海ではなくなりつつあり、カナダは「3つの海に囲まれた」国家であるという認識が広がりを見せている。首都オタワのカナダ・デーのイベントはカナダの現在をうつす鏡であり、今後も注目していきたい。

(おおいし たろう 関西学院大学教授)

(注) 本報告は、加筆・修正のうえ、「首都オタワのカナダ・デーの特徴と新たな動向」(『カナダ研究年報』第39号、2019年、印刷中)として発表した。